

# 新聞に親しみ、新聞を重要な情報源の1つとして学習や自分の生活に活用することができる生徒の育成を目指して

長野県下伊那郡喬木村立喬木中学校 片桐 安雄

## 1. はじめに

NIE実践校の指定を受け、たどたどしい歩みながらも2年次の実践に取り組んできた。2年次目を迎え、基本的には、特に奇をてらうことなく、1年次に掲げた標記テーマの継続とその達成しようとするための取り組みのさらなる充実を意図して、2年次の活動を試みてきた。1年次の取り組みの主たる内容は次の6項目であった。

- ① “NIE”新聞コーナーの設置
- ② 喬木村や本校関連の新聞記事紹介
- ③ 理科での新聞掲載天気図を活用した学習
- ④ 宝語科学習での季節新聞(壁新聞)づくり
- ⑤ 生徒による生徒への新聞記事紹介(主に授業の場で)
- ⑥ 社会科学習での新聞を活用した授業

## 2. 2年次も継続して取り組んだ実践の概要

1年次の取り組みのうち、1年次だけで終えた取り組みは、理科での新聞掲載天気図を活用した学習であった。これは、理科の教員によると、天気図を活用した学習が中学校の教育課程から省かれたことによるとのことであった。残りの5項目については、何とか継続して現在に至っている。それら継続している取り組みの状況を少しく紹介してみたい。

### (1) “NIE”新聞コーナーの設置

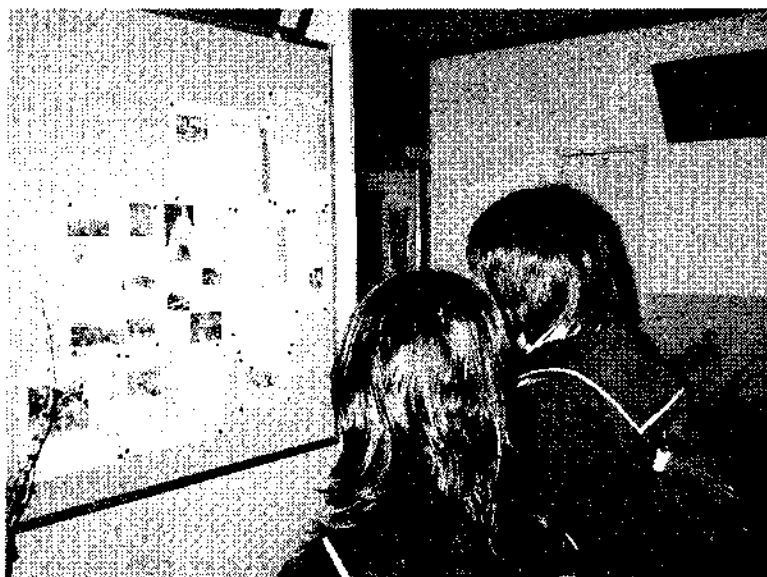
本校では、2学期までは、業間の時間が5分間に過ぎず、授業と授業の合間に新聞に親しむということは難しいことであった。そこで、コーナー設置の当初は、生徒が新聞に親しむことのできる機会は、15分の業間の時間や給食の前後の時間等に限られていた。そのせいもあって、当初は興味本位、あるいは、取り組み始めた授業時での生徒による新聞記事紹介にともなう必要感から新聞コーナーに集っていた生徒たちも、時がたつにつれて、1人2人と減り、そのうち、特定の「顔なじみ」の生徒だけが集まるにすぎない状況となった。「これではいけない。何とか対策をとらなければ…」と思ったが、なかなか有効な手だてを見いだすことができず、改善できないまま、ずるずると2学期を終えることとなった。

3学期になって、日課の変更が行われ、すべての業間の時間が10分間または15分間となって、業間に多少のゆとりが生じたことで、若干ようすに変化が見られるようになった。少しではあるが、教室移動のついでに、あるいは、図書館に来館したついでに、新聞コーナーで足を止めて新聞を開き目を通す生徒が見られるようになってきた。このことから、生徒を新聞に親しませるためには、もちろん新聞に関わる生徒への啓発活動が欠かせないが、それとともに、生徒が新聞に親しむことのできる時間的なゆとりを確保

することも必要なことではないかと考えさせられた。

## (2) 喬木村や本校関連の新聞記事紹介

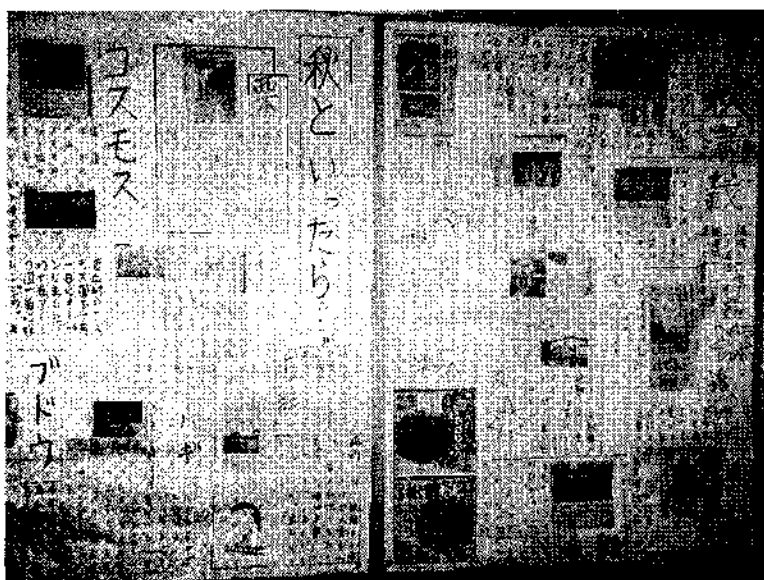
係の怠慢もあって、結果として、充実した記事紹介・



掲示とすることはなかなかできなかったが、一応は、活動発足時の状態のままを維持して現在まで至っている。生徒のようすを見ていると、生徒は、この記事掲示に足を止めて見ることを、ある程度習慣化してきたように思える。いっぽうで、生徒のなかには、この記事掲示から受ける刺激に麻痺してしまったような感も見られ、ありきたりの記事内容では、一目見るものの、興味わかずにすぐ離れ去る姿も少なくない。

## (3) 国語科学習での季節新聞（壁新聞）づくり

2年次においても、国語科では、季節新聞作りに取り組んでくれた。これは、NIE



とは直接関係なく行われている学習であるが、この学習は1年次と同様に「新聞離れ」、「活字離れ」の進む中学生、季節感の乏しい中学生の状況を少しでも改善しようとのことで取り組まれているものである。季節感を感じさせる記事を新聞から探し出して切り抜き、壁新聞風に紙面にレイアウトしてコメント書きとともに貼付して作りあげる。左の写真は、昨年度、秋号として、当時の2年生（現3年生）が作成したものである。

## (4) 生徒による生徒への新聞記事紹介（主に授業の場で）

授業時間の冒頭のおよそ5分間に、生徒が輪番で新聞の記事の中から気になったり興味を抱いた記事を自分なりの簡単なコメントも添えて紹介するという活動である。これまでやり方をほとんど変えずに現在に至っている。この活動は、本校の学校目標の1つである「自己表現のできる生徒」をある程度意識しての取り組みでもある。当初から、授業時間内で行うので5分以内で行う、やり方次第では新聞に対するアレルギー感を

引き起こさせかねないので生徒に過度な負担を負わせない、などのことを心がけ、教師のほうから気やすく、気軽な雰囲気醸して行わせるように心がけた。長く続けてきたので、マンネリ化してきたことは否めないが、それでも生徒は、毎時間、「社会科の授業はこれで始まる」という意識で授業に臨むようになってきた。

#### (5) 社会科学習での新聞を活用した授業

1年次には、2年生の地理的分野、3年生の公民的分野で新聞を活用した授業を試みた。2年生では、小单元「世界と日本の人口」の中の「過疎地域」についての学習場面で、過疎化に悩む地域がその問題を克服しようとして取り組んでいる「町おこし」や「村おこし」の具体的な事例を新聞から探し出してみようという形で新聞を活用した。3年生では、小单元「地方の政治(地方自治)」の中で、喬木村の合併の是非を学習問題に据えてディベート的な手法を取り入れた授業をしくり、その調査活動の一環として新聞を活用させた。このとき、新聞は、おもに、合併問題が浮上してきた背景や法的・制度的なしくみ、他町村の合併の状況などの情報を得るための情報源として活用された。

2年次には、1年次と別の学習単元で若干新聞を活用した授業を試みてみた。2年次の新しい取り組みとして次項で紹介したい。

### 3. 2年次に試みた実践の概要

#### (1) 社会科学習での実践事例

① 1年地理的分野：単元「第1章 世界のすがた」中の小单元「世界の国々」で扱った事例

i) 小单元「世界の国々」のねらいと単元展開計画の概要

ア) ねらい

190あまりある世界の国々について、生徒が、その国名や首都名、位置、国土などの特徴を調べたり、調査したことをもとにクイズやゲームなどをしたりすることを通して、さらに興味を抱き親しもうとする。

イ) 単元展開計画のあらまし

時	おもな学習内容(学習問題)
第1時	1 世界の国々について、項目ごとにベスト5以内にあてはまる国を地図帳や資料集を使って調べてみよう。 [項目] 国土面積の広い国・狭い国、人口の多い国・少ない国、人口密度の高い国・低い国 2 国土面積、人口、人口密度が日本にもっとも近い国はどこか、調べてみよう。 3 世界地図を使って、日本とほぼ同経度、同緯度にある国にどんな宝があるか、調べてみよう。
第2時	1 新聞に出ている国名を拾い出してみよう。世界白地図中のその国の位置に印をつけていこう。

第3時	1 次のクイズ、ゲームをしてみよう。 国土の形シルエットクイズ、漢字国名クイズ、 国名由来クイズ、国名ビンゴゲーム、国名しりとりゲーム
第4時	1 国名・国の位置テストをして確かめよう。

ii) 新聞を活用した授業場面とそのようす

新聞を活用した学習場面は、第2時の「新聞から、記事の中に出てくる国名を拾い出す」という場面である。ストックしておいたNIE用特別配達の新聞を教室へ持ち込み、ランダムに生徒へ1人あたり3部ずつ配布した。さらに、国境まで描かれてある世界白地図も生徒へ配布した。その上で、新聞の中の海外記事掲載紙面を指定し、その紙面に掲載されている記事の中に出てくる国の名をノートへ書き出させながら、その国の位置を地図帳で調べさせ、配布した世界白地図中のあてはまる位置へかんたんな印をつけさせていった。

生徒はけっこう意欲的に取り組んだように見受けられた。新聞という実社会で生きている媒体に名が出ているということで、生徒にとっては教科書などの教材の中で見るのとは、いくらか変わった新鮮な感覚で国名にふれ合ったようにも思え、その点では、新聞をつかった意義があったと思われる。

いっぽうで、個人単位で取り組ませたことは問題があった。生徒は狭い限られた机上で、新聞も、ノートも、地図帳も、白地図も広げ、それらの処理にたいへん苦勞してしまい、そのことに時間がかかって、肝心の学習作業が滞ってしまう面があった。ペア学習とか、班単位の形で取り組ませるなどすれば、さらに効果的な学習になりえたのではないかと反省が残った。

② 3年公民的分野：単元「第5章 地球社会とわたしたち」中の小単元「国際社会と世界平和」で扱った事例

i) 小単元「国際社会と世界平和」の単元展開計画の概要

ア) ねらい

生徒が、これまでさまざまな地域紛争が発生してきた国際社会の中で、近年、国際平和のためのルールづくりや国際協調のしくみづくりが進められきたことや、日本もこの動きに参加し国際貢献に取り組んでいることを知り、今後の自分と国際社会との関わりについて考えを持つことができる。

イ) 単元展開計画のあらまし

時	おもな学習内容（学習問題）
第1時	1 地域主義とは何だろうか。その発生の背景は何だろうか。 2 地域主義の具体的な動きにどのようなものがあるのだろうか。 地域統合、地域協力、国家間、地方自治体・民間レベル 3 地域主義の動きにはどのような課題があるのだろうか。

第2時	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 これまで世界ではどこでどのような地域紛争が起こってきたのだろうか。</li> <li>2 地域紛争の原因は何なのだろうか。</li> <li>3 地域紛争を解決するためにどのようなことが行われてきたのだろうか。</li> <li>4 現在、地域紛争はどうなっているのだろうか。</li> </ol>
第3時	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 主権国家とは何だろうか。</li> <li>2 国際社会にはどのようなルールがあるのだろうか。</li> <li>3 国際社会の中で生きていくために1人1人が心がけなくていかなくってはならないことは何だろうか。</li> </ol>
第4時	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 国際連合はどのような経緯で、何のために設立されたのだろうか。</li> <li>2 国際連合はどのようなしくみを持ち、どのような活動をしているのだろうか。</li> <li>3 日本は国際連合とどのような関わりを持っているのだろうか。</li> </ol>
第5時	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 冷戦の下で平和主義を掲げる日本はどのように安全保障政策を進めてきたのだろうか。</li> <li>2 冷戦終結後、日本は国際平和のためにどのような対応を行うようになったのだろうか。</li> <li>3 核兵器をめぐるこれまで世界と日本はどのような動きをしてきたのだろうか。</li> <li>4 平和主義を実現していくためにこれからの日本はどのような行動・努力をしていくことが求められているのだろうか。</li> </ol>
第6時	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 日本が行っているODAの状況はどのようになっているのだろうか。</li> <li>2 ODAの他に、日本が取り組んでいる国際協力にはどのようなものがあるのだろうか。</li> <li>3 自分ができる身近な国際協力にはどんなことがあるのだろうか。</li> </ol>
第7時	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 「日本は自衛隊をイラクに派遣すべきである。」をテーマにしてディベートを行う。</li> </ol>

ii) 新聞を活用した授業場面とそのようす

新聞を活用した学習は、第2時の「地域紛争と民族問題」、第7時の「自衛隊のイラク派遣問題についてのディベート」の各場面であった。

ア) 第2時の「地域紛争と民族問題」での活用例

授業では、まず、これまで世界各地でどんな地域紛争が起こってきたのだろうか。」と発問して、教科書と資料集の「世界の地域紛争地図」を見させながら

おもだった地域紛争の名と発生地をあげさせた。次に、おもな地域紛争をかんとんに説明・解説したプリントを配布して、それらの地域紛争を原因別に分類させた。平和維持活動を中心とした紛争解決の状況を教科書や資料集で調べさせたあと、現在の紛争の状況を紹介するための資料として、最近の新聞の中から、別に掲載した「自爆テロ 4人犠牲 ガザ 検問所でイスラエル人」の記事、「タミル人組織、内戦警告 スリランカ大統領に反発」の記事、「印パ、関係改善を継続」の3つの新聞記事を選んでプリントして紹介し、もっとも最近の地域紛争の現状をつかませようとした。前者2例は、いまだに深刻な事態が続き、解決の見通しが立たない現状にある紛争の事例として、後者1例は、解決の見通しが見えてきた紛争の事例として、それぞれ紹介しようと意図したものである。

このような新聞記事は各地域紛争の歴史的な背景を十分つかんでいないと内容の意味がなかなか理解できないと思われ、生徒の反応を見ても、記事内容の意味がよくわからなかったのか、今一步、反応の鈍さを感じた。そのため、授業時間の終了が迫っていてあせったこともあって、かなり教師のほうから強引な形で、記事の内容をかいつまんで説明し、「今なお続く紛争の中には、これらの事例のように、解決どころか逆に深刻化している紛争もあれば、解決の見通しがでてきた紛争もある。」とまとめて授業を終えてしまった。せっかくの新聞記事を十分に価値高く活用できず、反省させられた。

#### イ) 第7時の「自衛隊のイラク派遣問題についてのディベート」での活用例

この授業を行ったころは、ちょうどイラクの人道復興支援のために自衛隊がイラクのサマワに派遣されていたころで、国際貢献問題を学習するにはタイムリーな世相であった。難しい問題なのでかなり不安もあったが、時事問題を学習しておくことも必要と考え、さらに、正直に言ってこれまであまり取り組んでこなかったディベートに挑戦させてみようとも考え、ディベートにより実施することにした。

授業では、まず、別掲新聞記事「先遣隊派遣命令」を提示し、派遣命令が出されたことと、すぐ下に載っている派遣反対派の集会の新聞写真とを対比しながら、「日本は自衛隊をイラクに派遣すべきである。」とテーマを立てた。学級の生徒をランダムに2分して、自分の意思に関わりなく強制的に一方の立場に立たせ、まず、立論を全員に書かせたあと、双方の立場から代表者を5名ずつ出させて、他生徒を判定員とし、立論の発表→反論→最終弁論→判定という手順でディベートを行わせてみた。

資料集などには、自衛隊のPKOの参加やODA・青年海外協力隊のことなど、日本が国際協力を努力していることに関わる資料は載っていたが、派遣推進に水を差すようなニュアンスの資料があまり載っていなかったのも、そのニュアンスが感じ取れるような資料を新聞の記事から拾い出して、教師のほうから生徒にあたえた。別掲の記事である。

立論では、賛成論では、危険な地域で復興の仕事に携わることができるのは日本では自衛隊しかないから、自衛隊を派遣するのがよいというような趣旨の

論が多く、反対論では、危険でなければよいが、イラクへ行けば犠牲者が出る危険が大きいし、犠牲者が出ればその家族も被害を受けるから派遣しないほうがよいとの趣旨の論が多かった。

あたえた新聞記事の効果が大きくて、反対論に高評価をあたえる声が優勢となってしまう、資料に偏りを生じさせてしまった反省が残った。また、この問題を1時間で扱おうというのが無謀なことで、時間をとって、イラク戦争の経緯や、自衛隊のPKOへの参加の経緯などをある程度理解させた上でないと、内容の濃いディベートはなかなかできるものではないと痛感させられた。

#### 4. 2年次を終えて(成果と反省点)

- (1) 1年次当初は、意気込んで、据えたテーマを実現するために、わからぬまま、あれもこれもと手をつけていった。しかし、2年次を終えようとしている今、思い返してみると、分不相応に広げすぎた手をうまく收拾できないまま、やり散らかしたままでここまで過ぎてきてしまったように思う。この間、不十分ながらも、できる範囲で新聞活用教育に取り組んできたことで、多少とも生徒の新聞に対する意識を喚起できたのではないかと少しは自負しているが、胸を張って他人に誇れるような成果を上げ得なかったとの思いが強く残っており、申し訳なく思っている。
- (2) 教師が生徒の活動の見通しを立てる、つまり新聞の教材化をはかるためには、それを十分に行える教師側のゆとりがあるということも大きいように思えた。新聞の中にある膨大な量の情報の中にどんな情報があるのかを教師があらかじめ知っておかなければ教材化の第1歩を踏み出すことができない。それができたら、どういう目的で、そのうちのどの情報を、どういう形で生徒に提供したらよいかを検討し、指導案をつくる。そして、教材を準備し生徒の活動を迎えるという段取りを踏むが、この段取りを経るための教師のゆとりがどうしても必要であり、そのゆとりを日常の教育活動の中でどう確保していけばいいのか、正直に言って悩むことが多かった。
- (3) 新聞は、間違いなく重要かつ有効ですぐれた情報源であり、すぐれた教材であることを実感している。どちらかというところ、これまでの実践は、新聞を教材として生徒に触れさせることに意を重く置き過ぎたように思う。生徒の将来を思えば、教材として新聞に触れさせることよりも、新聞を有効に使いこなしていくためのスキルを生徒に習得させることにもっと重きをおくべきであったと思っている。
- (4) 2年間貴重な勉強の機会を与えてくださったことに感謝申し上げたい。これで指定校としての活動を終えるが、これをいい契機として、今後も、機会をとらえて新聞活用教育に取り組んでいきたい。

# 自爆テロ 4人犠牲

## ガザ検問所でイスラエル人

【エルサレム14日共同】のシャロン首相は和平交渉が地盤を失ったイスラエル領ガザ地区にあるイスラエル検問所にて、自爆テロに巻き込まれたイスラエル人4人が犠牲になった。

このテロは昨年十二月二日、イスラエル領ガザ地区にあるイスラエル検問所にて、自爆テロに巻き込まれたイスラエル人4人が犠牲になった。

イスラエル人4人が犠牲になった。このテロは昨年十二月二日、イスラエル領ガザ地区にあるイスラエル検問所にて、自爆テロに巻き込まれたイスラエル人4人が犠牲になった。

### タミール人組織、内戦警告

【ニューデリー21日共同】タミール人組織は、内戦を警告した。この組織は、タミール人組織の代表者として、インドの首都ニューデリーに到着した。この組織は、タミール人組織の代表者として、インドの首都ニューデリーに到着した。

乗せたバスが検問所を通り、在イスラエル日本人女性4人が犠牲になった。このテロは、ガザ地区のパレスチナ労働者受け入れ検問所で行われた。乗せたバスが検問所を通り、在イスラエル日本人女性4人が犠牲になった。

# 印パ、関係改善を継続

## 2年半ぶり首脳会談

【イスラマバード5日共同】インドのパジバイ首相とパキスタンのムシャラフ大統領は五日、イスラマバードの大統領官邸で会談した。両首脳による公式の会談は二〇〇二年七月以来、二二年には軍事衝突の危険が手酷化した両国の首脳会談実現の意気は大きく、昨年来の関係改善にさらに弾みをつける見込みだ。

インドのシハ外相は「会談内容のことが進展」と意気込みを語る。会談は約一時間続いた。詳細を話す立場にない。シハ外相は、懸案であるカシミール問題やテロ、核兵器問題などについて、両首脳が互いに理解を示し、関係改善の動きを加速させた。両首脳は笑顔で握手し、握手は緊張感を和らげた。外相は「首脳会談が実現した」と笑顔で話した。



5日、イスラマバードの大統領官邸で握手するインドのパジバイ首相（左）とパキスタンのムシャラフ大統領（AP=共同）

子で、豊後ムシャラフ大統領は連日、話しかけたものの視線を外す場面が多々、パジバイ首相の発言は、両首脳が互いに理解を示し、関係改善の動きを加速させた。両首脳は笑顔で握手し、握手は緊張感を和らげた。外相は「首脳会談が実現した」と笑顔で話した。

【印パ関係】英米統治から1947年に独立した際、ヒन्दゥ教徒中心のインドヒन्दゥ教徒中心のパキスタンに分離。イスラム教徒が多いカシミール地方がインド側に編入された。この両国の領土争いが、80年代の領土争いの原因になった。カシミール地方はインドが約95%、パキスタンが3%、残り半が国が支配している。80年代末からインド側でイスラム過激派の活動が活発化し、インドはパキスタンを過激派を容れず監視させていると非難。両国は98年に相次ぎ核実験を実施した。

### 5. 関係資料

- (1) 3年公民的分野：小单元「国際社会と世界平和」第2時で扱った資料



# 先遣隊派遣命令

## 16日にもイラクへ

### 石破「安全確保は十分 長官」

石破防衛庁長官は16日午後、陸上自衛隊に対し、イラク南部・サマワへの派遣を要請する要請書に、治安状況の概況や本隊受け入れの準備を十分確保するため、約千人の先遣隊を派遣して偵察に派遣する命令を出した。派遣は同日深夜(対イ)20:00発動を旨とし、本隊は後命令を出した。

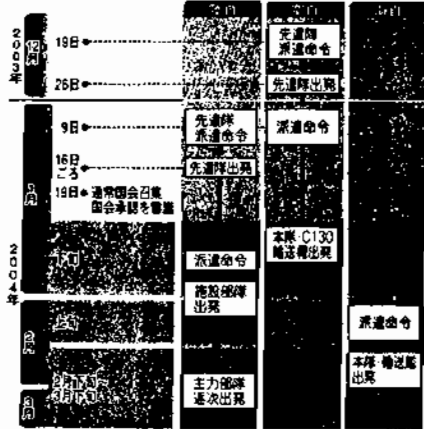
【朝日新聞2003.3.16】

### 空自本隊22日出発

「最大の努力を」と  
表明した。

自衛隊が展開している「守防態勢」を本として日本、「先遣隊の安全確保は十分に戦地に随分自給自足の防衛隊の大規模な一分と判断し、命令を出み入れるのは初めて。専ら、石破は記者会見で「十分、引当り安全確保

予想される自衛隊派遣の流れ



# 出発迫る

旭川の隊員たち

## 自衛隊50年とイラク



イラク派遣に向け訓練が続く陸上自衛隊員。昨年12月11日、北海道千歳市の陸上自衛隊千歳駐屯地



「陸上自衛隊時代」「師団通り」と呼ばれ、無数の兵士を大膽へと送った。跡地を引継いだ陸上自衛隊第二師団は、冷戦下「東北の守り」を使命とした。自衛隊発足から七月で五十年。いま派遣支援の名の下、イラク・サマワへの出発の日が迫っている。

「陸上自衛隊時代」は旧陸軍時代「師団通り」と呼ばれ、無数の兵士を大膽へと送った。跡地を引継いだ陸上自衛隊第二師団は、冷戦下「東北の守り」を使命とした。自衛隊発足から七月で五十年。いま派遣支援の名の下、イラク・サマワへの出発の日が迫っている。

### 友よ「撃たれたら守ってくれるか」



イラク派遣を控えた陸上自衛隊第二師団の隊員が、無事帰国できるよう願いを託した絵馬。3日、旭川市の北海道護国神社

「国のため、日本のために行く。覚悟は決めている」。派遣に向けて聞かれた兵士は、そう答えてきた。旭川に生まれ育ち、軍人だった親せきの影響もあって入隊。三十代半ばになるまでに国連平和維持活動(PKO)も経験するようになった。だが、サマワでは危険度の高い業務に従事する。「おれは一番狙われやすい。狙われたら帰ってこられない」。隊員の兄はそう語がされ、ひとことだったイラクの「ニーズ」が胸に迫るようになってきた。「人に向けて撃たれてはダメだ。隊員の顔面が頭を守り不安を醸成す弟を「誰か向を撃つて守って」とたじろめた。

### 「パパがイラクで死にませんように」

「死ななさん」。ケリスアスの夜、メチランの派遣隊員がつぶやいた。妻は病気で入院していた。第二師団の隊員は約半年八月の派遣期間で派遣先「師団」に帰国し、その後は別の派遣先へ派遣される。派遣先は「師団」に入隊し、その後は別の派遣先へ派遣される。派遣先は「師団」に入隊し、その後は別の派遣先へ派遣される。